

# **Some Issues in Introducing of English Qualifying Examinations for the Selection of University Entrants: The Contradiction between Four Language Skills Integrated Instruction and Four Language Skills Separated Measurement**

Masahiro MAEDA<sup>†</sup>

## **Abstract**

The introduction of private English language qualifications for the selection of university applicants was considered in order to measure the multiple English language skills of learners especially for high school students. Based on the results of a questionnaire survey from students taking skill-separated courses rather than skill-integrated courses, this research aims to answer the following questions: (1) How do students taking skill-separated courses at university view their skill-integrated lessons in high school in retrospect? (2) How do students taking skill-separated courses at university view the current skill-separated courses?

The results of questionnaire revealed that many of participants in this survey thought that skill-integrated courses in high school would be better than skill-separated courses. However, they pointed out the imbalance of skill instruction in skill-integrated courses in high schools, especially the thinness of skill instruction related to speaking.

This study revealed the advantages and challenges of skill-integrated and skill-specific instruction, and we believe that the use of the four-skill-separated examinations for university entrance selection should reflect the learners' opinions revealed in this study in order to guarantee the integration of instruction and assessment.

## **Keywords**

entrance examination, instruction, learning strategy

---

<sup>†</sup> maedam@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

# 大学入学者選抜のための民間の 英語資格・検定試験導入に関する課題

## —4技能の総合的な指導と4技能の分離型測定が引き起こす矛盾—

前田 昌寛<sup>†</sup>

### キーワード

入試, 授業形態, 学習方略

### 1. はじめに

高等学校学習指導要領解説英語編（文部科学省，2018，p.9）では、「五つの領域（聞く・話す（やり取り）・話す（発表）・読む・書く）別の言語活動及び複数の領域を結び付けた統合的な言語活動を通して，五つの領域の総合的な指導を行う」と明記されている。我々の日常における言語使用は単発的な技能使用はあまり行われていない（Maeda, 2018）ことから、「聞いたことについて話す」「読んだことについて書く」など，技能を統合した言語活動を通して，五つの領域の「総合的」な指導を行うことは重要である。

この「総合的」な能力を測るべく，大学入学者選抜のための民間の英語資格・検定試験（以下，検定試験）として，ケンブリッジ英語検定，実用英語技能検定，GTEC，IELTSなど，4技能それぞれの閾値を合計する形式の検定試験の導入が検討された。鳥飼（2019）は，4技能を総合的に学習するのに、「なぜ『4技能』をバラバラにして（『話す』力を）測定する必要があるのか」と指摘しているように，4技能を分離して測定することには以下の問題がある。1点目は学習者に起因する問題である。学習者は五つの領域の「総合的」な指導を受けるにも関わらず，4技能を「分離」させ，それぞれの閾値を合計する形式の検定試験を受ける。そしてそのような分離型の結果を受けて，その

後どのような学習方略を取るのだろうか。例えば，リスニングの成績だけが極端に悪かった場合，その学習者はその後，五つの領域の「総合的」な指導を，これまでと同じようなモチベーションで受けていけるのだろうか。このような場合，五つの領域の「総合的」な授業よりも，足りない技能のみに対する「対策」を求めないだろうか。学習者のみならず現場の教員の立場に立てば，不得意な技能のみを集中して伸ばしたいと思うのも当然のことである。指導と評価の一体性は保証されるのだろうか。そして2点目は，指導者に起因する問題であり，技能（領域）をバランスよく「総合的」に指導できるのかということである。4技能それぞれの閾値を合計する形式ならば，各技能（領域）の指導が同じウェイトであるべきだが，実際は「読むこと」に偏っているケースも少なくない。新カリキュラムに対応する文部科学省検定済教科書が，各技能（領域）の指導が同じウェイトになるよう構成されているかという問題もある。「4技能の土台は読解力」（鳥飼，2019）であり，授業では教科書の作りが主に「読み物」のためリーディングが中心となる側面がある。そのため，音声系の技能を補うために放課後や長期休暇中の補習で，「スピーキング講座」や「リスニング対策」などといった「単技能の（音声）対策講座」が全国の高校で横行し，「五つの領域の総合的な指導」という学習指導要領の

理念が実現しない危険性がある。大学入学共通テストの前身である大学入試センター試験にリスニングが導入された際、高校現場ではリスニング指導に対する意識は高まった。しかし現場では、模擬試験等で学習者集団として「リスニングの成績が悪い」となると「リスニング教材」を発注し、教師はリスニングのみを切り取って指導をすることがあった。「リスニングの指導とテストングを混同」し(米津・小倉, 2017), 教科書の内容と切り離れたリスニングテスト形式の問題演習をするといったことが見受けられたのである。

筆者が教鞭をとる大学では留学を目的としてIELTSを採用し、講義もIELTS対応型の4技能別の指導を行っている。学生たちは、このスコアで留学先が決まるというモチベーションでも意欲的に勉強する。これは入試を控えた受験生が得点アップを目指して一生懸命に学習する姿勢に負けず劣らずの様子であり、大学入学選抜のための4技能分離型の検定試験の導入に関して様々な示唆を与えてくれるはずである。本調査研究では、技能別の講座を受講している学生からの質問紙調査の結果を基にして、次の2点(RQs)を明らかにしたい。

RQ1: 大学で技能別の講座を受講している学生たちは、高校での技能総合的な授業を振り返ってどのようにとらえているのか

RQ2: 大学で技能別の講座を受講している学生たちは、現在の技能別の指導をどのように感じているのか

## 2. 先行文献・事例研究

### 2.1 「英語力」と「英語力の測定」とは

英語力を測定するとき、その「英語力」とは一体どのようなものを指しているのだろうか。つまり、生徒がつけるべき「英語力」とはどのようなものだろうか。山田(2006)は、英語力の定義として、共通基底能力、入力チャンネル、外部形式の3要素を挙げている。共

通基底能力とは「日常的な言語活動を支える知識や経験の総体」を指す。例えば、言語に関係なく、九九ができるといったことである。入力チャンネルとは、日本語の出力・英語の出力があり、共通基底能力を上手く機能させるため、外部言語形式につながるものと考えられている。つまり、共通基底能力にある $3 \times 3 = 9$ という算数の概念を、日本語では「さんがきゅう」、英語ではthree times three equals nine.と表現するための回路である。そして、外部形式とは直接観察できるいわゆる4技能としての言語活動を指す。共通基底能力という装置とやり取りを行う入力チャンネルの考え方はL1とL2を使い分ける方法である。一方で、最近の英語教育は4技能指導から五つの領域指導に変わり、「即興でのやり取り」が強化されたことからわかるとおり、共通基底能力を表現する言語チャンネルに日本語を介さず、L2(外部言語形式:英語)→共通基底能力→L2(外部言語形式:英語)という直読直解や即興のやり取り、つまりL2→L2のダイレクトな方法で訓練させようとしている。例えば音読もダイレクトな言語処理を目指す言語訓練の一環であり、音読を取り入れる教員も多くなってきている。

また、英語力を測定することの意味についても考えてみたい。山田(2006)は、英語力を数値化して示す方法に関して、次のように述べている。

生徒が次に何をすべきかが自然と見えてくるようなものであることが理想です。そして残念なことに、現在の英語教育に欠けているのはこのような具体的な視点なのです(p.48)

どんなテストであれ、それを目的にするのではなく、自分の英語学習の中で正しく位置づけること、平たくいうなら、テストの点数に拘泥するのではなく、テストを具体的な英語力

を見定める指標として効果的に利用すること (p.p.76-77)

山田 (2006) はこのように、測って終わりではなく、その後どのように結果を活用するかが重要であると主張している。つまり、先述した「指導と評価の一体化」の重要性について言及しているのである。「大学入学者選抜のため」と目的化しがちな検定試験にあって、「次に何をすべきかが自然と見えてくるようなもの」になっているのか、そしてそれを指導する側がビジョンとして持っているのか懸念されるところである。また、山田は4技能を分離させて測定する検定試験の特性を、実際の指導との関係において次のように述べている。

話す、聴く、読む、書くなどの技能は、言語活動として観察できるため、指導の目標として掲げやすいでしょうし、実際の訓練の対象にしやすい (p.43)

技能別に熟達度をそれぞれ測定し、その結果を総合的に判断することによって言語能力を説明しようと考えたのはLado (1961)であり、その後のテスト研究にこの方式が採用されることになったと言われている。そして山田 (2006) は、このように抽象的な英語力を分解して扱いやすい形式に変えたところで本質的な問題が解決されるわけではないと主張している。さらに、Madsen (1983) は次のように述べている。

大切なことは（言語の構成要素のような）こうした成分がそれ自体でコミュニケーション技能を表していないということを認識しておくことである。また、それらをつなぎ合わせたところでコミュニケーションが生まれるわけでもない (p.73)

これは2008年版の中学校学習指導要領英訳版（仮訳）を見ても、その懸念は明らかである。

## I. OVERALL OBJECTIVE

To develop students' basic communication abilities such as listening, speaking, reading and writing, deepening their understanding of language and culture and fostering a positive attitude toward communication through foreign languages.

生徒の基本的なコミュニケーション能力 (students' basic communication abilities) の具体例 (such as) が、聞く、話す、読む、書くなどの技能 (listening, speaking, reading and writing) であるという解釈が英訳版からは明白にわかる。Madsenが指摘する「技能をつなぎ合わせたところでコミュニケーションが生まれるわけでもない」ということを正に意識しなければならない事例である。

## 2.2 大学側の入学者選抜における検定試験の活用と英語技能指導の改革事例

次に検定試験を活用する方である大学側の動きについて考察してみたい。2014年12月、文部科学省にて「英語力評価及び入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」（以下、連絡協議会）が発足した。この連絡協議会のウェブサイトに、「大学入学者選抜制度 先進的な取り組み事例」として、ある私立大学の入試会改革の取組から「英語4技能テスト利用入試がもたらした効用と課題」という報告がなされている。この中で特に興味深いのは次に書かれた事柄である。

- (1) 技能別科目だった英語授業を4技能統合型に変更し、訳読中心の英語教育からの脱却を目指す
- (2) 英語4技能のバランスが取れた高い英語力

を持つ学生を集めることで、今後の英語教育改革に加速をかける

(1)の技能別科目だった英語授業を4技能統合型に変更することで、なぜ訳読中心の英語教育からの脱却が図れるのかは定かではないが、英語授業を4技能統合型に変更することは大きな改革である。また(2)で述べられているのは、「英語4技能のバランスが取れた高い英語力を持つ学生を集めること」が起点であり、「今後の英語教育改革に加速をかける」ことが期待される結果である。「今後の英語教育改革に加速をかける」ことによって、「英語4技能のバランスが取れた高い英語力を持つ学生を集める」のではないようである。これは学生たちや教員の声にも興味深く表れている。

(1)(学生) 友達の中には、ライティングやリーディングでいいスコアが出ても、苦手とするスピーキングで高得点が取れなくて大学の指定する基準に満たず、受験資格が得られないという人もいました。

(2)(教員)「一般入試(英語4技能テスト利用型)」の制度を導入したことで、学生のレベルアップにつながっていると感じています。従来からの3科目入試を併願するケースも多く、両方で合格した学生もたくさんいます。英語の授業でも、この制度がなかった昨年と比べて、今年の学生たちは英語でよくディスカッションができますし、英語力が全然違う。

これらの声から推察すると、この大学には4技能にバランスよく英語力を持っている学生が入学してくるので、技能別科目だった英語授業を4技能統合型に変更することができると解釈できる。つまり大学側としては、既に4技能にバランスよく能力のある学生を取りたいわけで、4技能のバランスの良い育成は高

校側に委ねられることになる。これは同大学のケースに限ったことではないだろう。

### 3. 質問紙調査の分析

協力者は、留学を目的としてIELTS資格取得に関する技能別の講座を受講(1年生全員受講)している私立大学1年生40名(女子28名, 男子12名)である。2019年7月に質問紙による調査を行った。

Q1: 高校の時の、英語の授業(コミュニケーション英語)のように、4技能(Listening, Reading, Speaking, Writing)を総合的に教える授業で、IELTSに対応する力についていたと思いますか。

【①よくついたと思う ②ある程度ついたと思う ③つかなかったと思う ④どちらとも言えない】

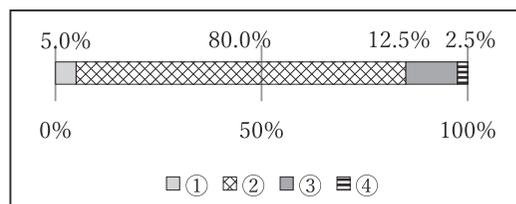


図1. 質問紙調査項目Q1への回答

図1のとおり、80.0%(32名)の参加者が「ついていたと思うが、技能によっては差が出た」と回答している。また、12.5%(5名)の参加者は対応する力が「つかなかった」と回答している。

Q1への追加質問:「②ある程度ついていたと思う」を選んだ人は、どの技能に一番差が出ましたか。(1つのみ選択)【①Listening ②Reading ③Speaking ④Writing】

図2に示すように、「どの技能で最も差が出たか」を、Q1で②と回答した参加者を対

象に尋ねたところ、68.8% (22名) の参加者が Speaking と回答している。そのほとんどが「高校の時には話す機会がなかった」「授業で話す練習がなかった」と回答している。ついでそれぞれ12.5% (4名) で Writing, Listening と発信系または音声系の技能となっている。

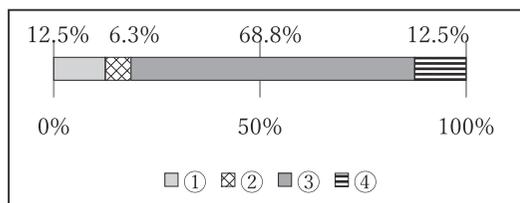


図2. 質問紙調査項目 Q1 に関する追加項目への回答

注：小数点第2以下を切り上げたため、総計が100%にならない

Q2: 高校の時の、英語の授業 (コミュニケーション英語) のように、4技能 (Listening, Reading, Speaking, Writing) を総合的に教える授業で、IELTS のある一部の技能だけスコアが良くなかった場合、あなたならどうしていたと思いますか。

【①スコアが良くなかった技能を重点的に指導してほしいと先生にお願いする, ②スコアが良くなかった技能を重点的に自分で勉強する, ③スコアが良くなかった技能を授業外で誰かに習う, ④その他】

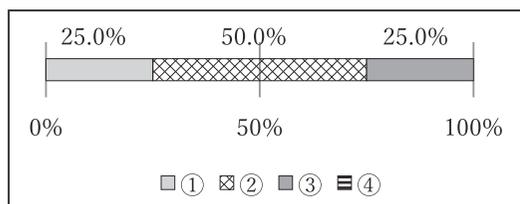


図3. 質問紙調査 Q2 への回答

図3のとおり、50.0% (20名) の参加者が「自分で勉強する」と回答している。また、それぞれ25.0% (10名) の参加者は「スコアが良くなかった技能を重点的に指導してほしいと先生に

お願いする」あるいは「授業外で誰かに習う」と回答している。

さらに Q2 への追加質問として、「③スコアが良くなかった技能を授業外で誰かに習う」を選んだ人は、主に誰から習いますか。【①授業担当の先生, ②授業担当以外の先生, ③外国人 (ALT) の先生, ④塾などの先生】と問うことによって、学習者が検定の結果を受けて、誰に指導を求めるのかを明らかにする。

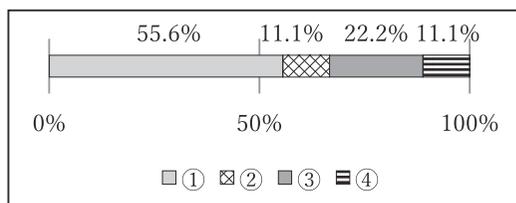


図4. 質問紙調査項目 Q2 に関する追加項目への回答

図4に示すように、③の「誰かから習う」では、具体的には授業担当の先生が55.6% (5名) を占めており、高校段階の総合英語担当者が生徒からの個別の技能に関する相談や要望を担う可能性を示唆している。

Q3: 次の項目について、その技能の練習において関係の度合いを選んでください。

【①=全く無関係, ②=少し無関係, ③=少し関係がある, ④=とても関係がある】

それぞれの技能と項目にある活動との関連性の度合いを尋ねている。表1が示すとおり、該当する技能と直結する練習 (会話する → Speaking, 書く → Writing) の関連性の度合いは一番高く出る傾向にあるが、音読に関しては Writing を除いてすべての技能との関係性の度合いが高く出ている。これは高校段階までの「音読指導」が現場でよくなされていることと関係があるだろう。しかし例えば、「これから学ぶトピックについて友達と英語で会話する」

表1 質問紙調査Q3への回答 (%)

	これから学ぶトピックについて友達と英語で会話する				これから学ぶトピックについて英文を読む				英文を音読する			
	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
Listening	12.5	32.5	20.0	35.0	27.5	22.5	27.5	22.5	10.0	17.5	22.5	47.5
Reading	27.5	32.5	22.5	17.5	5.0	5.0	7.5	82.5	1.0	15.0	17.5	57.5
Speaking	0	7.5	27.5	65.0	12.5	27.5	27.5	32.5	7.5	7.5	10.0	75.0
Writing	15.0	30.0	32.5	22.5	15.0	12.5	37.5	35.0	17.5	32.5	30.0	20.0
	読んだり聞いたりしたことに関して感想などを英語で話す				読んだり聞いたりしたことに関して感想などを英語で書く							
	1	2	3	4	1	2	3	4				
Listening	17.5	22.5	27.5	32.5	27.5	42.5	22.5	7.5				
Reading	22.5	37.5	22.5	17.5	15.0	35.0	30.0	20.0				
Speaking	10.0	7.5	15.0	67.5	15.0	17.5	47.5	20.0				
Writing	15.0	17.5	32.5	35.0	10.0	5.0	12.5	72.5				

(注) 網掛けは、その項目の最高値

「読んだり聞いたりしたことに関して感想などを英語で話す」の項目において、Readingと関係性の度合いが低い（「全く無関係」または「少し無関係」）と回答した参加者が、それぞれ60.0%（24名）と半数を超えている。

つまり、これから読むという行為に対して背景知識を活性化させること、あるいは読んだことについて話すことによって読解プロセスの再構築が起きることなどというReadingとの関連性が理解されていない可能性を示唆している。

Q4:大学の授業のように4技能（Listening, Reading, Speaking, Writing）を分けて教える授業はどう思いますか。【①とても良い、②良い、③あまり良くない、④良くない】

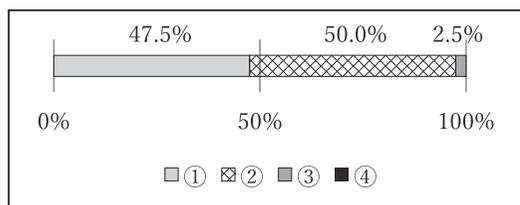


図5. 質問紙調査Q4への回答

図5が示すとおり、97.5%（39名）の参加者が4技能を分けて教える授業を、「①とても良い」または「②良い」と好意的にとらえている。好意的な理由と反対の理由を付録1に記載する。

Q5:高校の時の授業も、大学の授業のように4技能（Listening, Reading, Speaking, Writing）を分けて教えてほしかったですか。【①とても思う、②そう思う、③あまり思わない、④思わない】

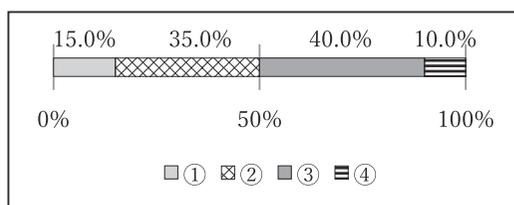


図6. 質問紙調査Q5への回答

図6で示すとおり、Q4ではほぼすべての参加者が4技能分離型の授業に好意的であったが、高校の授業となると、その数字は半減する。50.0%（20名）の参加者が「思わない」または「あまり思わない」と回答している。

付録2に高校における4技能分離型指導の肯定意見と反対意見をまとめた。主な肯定意見では、技能間の均等な伸長、技能別の伸長度の明確さがあげられる。一方で主な否定的な意見としては、負担が大きい、4技能を別々に学習しても全技能を発揮する場（全技能を使う場）は限られるというものだった。

#### 4. リサーチクエストに対する考察

##### 4.1 RQ1：大学で技能別の講座を受講している学生たちは、高校での技能総合的な授業を振り返ってどのようにとらえているのだろうか

参加者は、発達段階を考えると労力的な側面から、高校では総合的な授業が良いと考えている。しかし、高校での総合的な授業における技能指導のアンバランスさ、とくに音声・発信に関する技能指導の薄さを指摘している。このことから、現在の高校での総合的な授業における指導技能の偏りを改善することが大切だと考えられる。また検定試験で一部の技能が悪かった場合「自分で勉強する」という回答が多かったことから、自己学習できるようSpeakingやListeningの学習の仕方自体（学習方略）も指導していく必要があると考える。

##### 4.2 RQ2：大学で技能別の講座を受講している学生たちは、技能別の指導をどのように感じているのか

参加者は、大学での技能別の指導を大変好意的に受け止めていることが分かった。その理由として(1)目的と達成度の明確性、(2)各技能における深い学びの達成感、があげられる。(1)は技能別の指導だからこそ「〇〇の力を伸ばしている」という見えやすさがあるが、これは高校での総合的な授業においても当然大切な感覚である。生徒にとって「〇〇が伸びている」「〇〇ができるようになった」という成果の「見える化」が、学習動機の向上へとつながるであろう。また(2)については、今回の結果はとて

も大きな示唆を与えてくれている。つまり、総合的な授業では深い技能ストラテジーを教授しきれていない可能性がある。例えば、Readingでは読む目的を明確にして、どのような素材をどう読むのかの指導が大切であり、スキニング(scanning)やスキミング(skimming)の効果的な使い分けなどのストラテジー指導も積極的に行われるべきである。

#### 5. まとめ

高校での技能統合的な言語活動を通した総合的な授業は、検定試験が4技能を分離して閾値を足したような各技能の切り貼りではなく、日常生活におけるコミュニケーションの場面を想定した技能が絡み合ったものへとってきている。しかし、検定試験が4技能を分離させそれぞれの閾値を合計する形式であり、「大学入学者選抜のため」と目的化してしまいがちで、さらに検定試験を受けた後の評価と指導の一体化の脆弱さを考えると、教室での指導と検定試験による評価が分離してしまう懸念がある。

本調査の参加者らはIELTS1回目(6月)の受験を終えて分離型の評価を見たうえで、2回目(8月)の受験を控え、次のような声を寄せ、筆者の心を大きく揺さぶった。(1)先生が担当のリスニングだけが悪かったです。先生はリスニングの時間にスクリプトの音読時間を取っていますが、あれはリーディングであり、時間のロスです。もっとリスニングの問題をやってください。(2)先生の担当はリーディングの時間なのに、「テーマについて話し合う」などスピーキングの授業になっています。もっとリーディングの問題をやってください。(3)先生、余計な活動を入れずにもっとひたすら教科書の演習問題を進めてください、などである。

(1)に関しては、スクリプトを読み声に出すことは、リスニングにつながる活動だと幾度となく指導したうえでのものだった。そしてこの

ような学習(音読)を1人になったときでもできるように, という学習方略指導のつもりだった。(2)は, これから読む英文についての背景知識活性化のための活動であった。また, 読んだことについて話し合うことで, もう一度本文を読むということにつなげる意図があった。(3)については, 教科書に並ぶ無機質な練習問題を「教材化」し, ペア学習やグループ学習に改変したり, 並べ替え問題はカード形式にしてペアワークにさせたり, ジグソーリーディングを取り入れたりして使っていたのを, 「教科書を直接的に使っていない」=「問題を十分に解いていない」と受け止められていたようだ。技能別の講義だったとしても, 統合的な言語活動を通して総合的な指導を行おうとした意図が学生に伝わり切れていなかったのは, 筆者の力量不足から生じている面もある。しかし, 検定試験が導入され, 学習者が分離型の評価を見た時に, 例えば「先生, (総合的な)授業で行っていたディベートやディスカッションは, (分離

した評価の)どの技能に結びつくのですか?」という学習者の真摯な疑問に対し, 明確な答えを用意しなくてはならない。かつ, それが4技能分離型の検定試験の一部の技能向上における「特効薬」ではなくて, ずっと続けることで総合的に効果が生まれる「サプリメント」のようなものであることを理解させ, 体感させる必要がある。放課後や長期休暇中の補習といったピンポイントに効く「頓服薬」での対処療法的治療に頼ることは避けたいものである。「大学入学者選抜のため」という目的の限定化を避けるため, また, 政府の教育再生実行会議(2013)でも指摘されているように, 1点でも多く点数を得るためのミクロな入試勉強ではなく, 一定の「ハードルを越える」というイメージで, グローバルな英語力をマクロの視点からつけることを求めるべく, 指導と評価の一体化が保証された検定試験の導入の在り方を検討し, 大学間で共有する必要があるだろう。

---

## 引用文献

- 英語4技能 資格・検定試験懇談会(2019).「英語4技能テスト利用入試がもたらした効用と課題」. 英語4技能情報サイト [http://4skills.jp/selection/advanced/waseda\\_univ.html](http://4skills.jp/selection/advanced/waseda_univ.html)
- 鳥飼久美子(2019).『ことばの教育を問いなおす』東京:ちくま新書.
- Madsen, H. S. (1983). *Techniques in Testing*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Maeda, M. (2018). The potential advantage of dictogloss as an assessment tool for EFL learners' proficiency. *ARELE*, 29, 33-48.
- 文部科学省(2008).『中学校学習指導要領英訳版(仮訳)』. [https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/04/11/1298356\\_10.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/04/11/1298356_10.pdf)
- 文部科学省(2018).『高等学校学習指導要領解説:外国語編 英語編』東京:開隆堂出版.
- 山田雄一郎(2006).『英語力とは何か』東京:大修館書店.
- 米津明彦・小倉美津夫(2017).「高等学校における言語活動の研究(1)ーリスニング活動の理論と実践ー」『日本福祉大学全学教育センター紀要』第5号, 13-22.
- Lado, R. (1961). *Language Testing*. London: Longman.

付録1 大学における4技能分離型指導の肯定意見と反対意見

	授業（教員）に対する要因	学習者内の要因	評価に関する要因
とても良い・良い	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能別の宿題が出るので、力が伸ばしやすい</li> <li>専門的に教えてもらえる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>分けてあることで1つ1つに集中でき、学びやすい</li> <li>1つ1つの分野に対して深く学べる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>何が得意ではないか瞬時にわかる</li> <li>資格のための勉強に特化しやすい</li> </ul>
あまり良くない・良くない	<ul style="list-style-type: none"> <li>担当する教員によって差が出る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Listening, Speakingを最初に、そしてReadingやWritingを段階的に学ぶ方がよい</li> </ul>	

付録2 高校における4技能分離型指導の肯定意見と反対意見

	授業（教員）に対する要因	学習者内の要因	その他の要因
とても思う・そう思う (n=20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>ListeningとSpeakingは完全に分けたほうが良いと思う。分けてやらないとこの2つの技能は伸びないと(大学で)分かった</li> <li>WritingとSpeakingに関してほとんどカバーされず、独学にまかせられていた</li> <li>高校の勉強(授業)では海外で通用しないと感じた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高校の総合英語では、せっかくReadingをしていたのにWritingに変わったりと、使う技能がころころ変わり、今どの技能を伸ばしているか分からなくなっていた</li> <li>大学から急に4技能別になると、大変でついていけない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>高校は受験のための英語がメインだったから、他の技能も勉強したかった</li> </ul>
あまり思わない・思わない (n=20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能別にするには、高校の45分や50分では時間が足りないと思う</li> <li>高校の授業でも、1つの英文に対して、黙読して音読して、聞いて、要約するために書いてと4技能を使っていた</li> <li>その技能を練習しても、その成果を実感できるチャンスが無かったと思う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語だけで4つ(4科目)あると大変だと思う</li> <li>高校生にしたらずいレベルが高いのではないかとと思う</li> <li>英語が得意な人はよいが、高校だと英語が苦手な人もいると思うし、英語だけ(で進行する)の授業が増えそうで辛い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>センター試験と2次試験にはLとRしかいらなかった</li> <li>大学に入る試験の勉強をしなくてはならない</li> </ul>